

道徳部会

研究主題 人とのかかわりを通して、
よりよい生き方を目指そうとする生徒の育成

1 主題について

自分の考えをもち、他者とのかかわり合いを通して、相手の気持ちもとらえながら考え、生き方を見つめたり、考え直したりすることをねらいとして本主題を設定した。

2 今年度の取組

月 日	実践内容	月 日	実践内容
4月10日	第1回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	11月13日	第2回総合研究会 授業研究会（第二中学校）

3 研究内容

(1) 授業研究

- ・期 日 平成26年11月13日（木）
- ・主 題 名 愛校心 内容項目〈4－（7）〉
- ・資 料 名 「二枚の写真」
- ・会 場 第二中学校
- ・授業者 中嶋 舞衣子

① 授業者から

- ・閉校を迎えるという節目の年にいるからこそ、この内容項目で授業をしたいと考えた。
- ・授業を通して、学校には様々な人たちの思いがあることを考えさせたかった。
- ・思考がぶれないように、授業のはじめに「今日は自分と学校の関わりを考える」ことを伝えた。
- ・学校に関わる人々を広く捉えられるよう、自分が経験した学校のよさや、先輩たちを通して見たよさ、先生の存在などを、生徒の発言や終末の中で押さえた。リレー発言をさせる中でも、同級生の存在に偏りそうな時は、切り返しの発問で、軌道修正を図った。



【生徒の考えを整理して板書する】

② 協議

終末の3年生からのメッセージについて

- ・3年生に資料を読んでもらい、授業のねらいを伝えた上で書いてもらった。内容には手を加えていない。

リレー発言について

- ・生徒の考えがずれたときは、ストップをかける。また、「このまま進んでいいのか」と問うと、生徒たちは自分たちで軌道修正を図ることもできる。

体験活動との関連を図った題材の工夫について

- ・「浩にとって学校とは何だろう」という発問に対して、生徒たちは自分が経験したかのような話し方をしていた。これまで学校で行っていた様々な体験の意味を理解させたり、体験後のふりかえりをていねい行ってきたことの積み重ねがあつてこそ、あのような生徒たちの発言であったと思う。生徒の様々な体験が考えの柱となっていた。
- ・道徳教育は、道徳の時間だけではなく、全ての教育活動がかかわっていることを、生徒たちの発言から感じ取ることができた。

道徳的価値を内面に自覚できる指導方法の工夫について

- ・資料の力がすばらしい。内容は三年生向けかと思っていたが、中心的な発問や補助発問を経て生徒たちは価値へと向かっていた。
- ・卒業式の話が出てくるが、小学校で卒業式を経験している一年生は、十分に卒業式の

- 重さを理解している。資料を通して道徳的価値を自分のこととして受け止められていた。
- ・資料には浩、同級生、先生といった登場人物がいるが、本時は浩の立場からの授業構成であった。登場人物それぞれに重要な言動がある中で、浩の立場からだけで考えが深まるのかと思った。
 - ・確かにいろいろな立場がある。ただ、先生の心情を考えるのは難しいと思った。押さえた場面や大切な部分が多い資料であるが様々な可能性をそぎ落として発問を構成した。
 - ・「愛校心」という言葉が生まれる過程を大切にしたい授業構成であった。友達との関係だけでは「友情」にまともになってしまうところを、先輩や自分を理解してくれる人たちとの関わりを押さえることで、価値へと迫っていた。
- (2) テーマ研究
- ・各校で、本時と同じ主題と資料で実践したものを紹介しながら協議を行った。
- (3) 指導助言（北教育事務所鹿角出張所 指導主事 田中 覚）
- ・閉校を迎える学校の状況や生徒の実態、教師の願いに基づいた主題が設定されていた。体験活動等との関連を生かした道徳の時間が構成されていた。
 - ・内容項目の4－（7）愛校心の内容を踏まえ、読み物資料が適切に活用されていた。
 - ・アンケート結果や生徒の反応を生かしたコンパクトな導入であった。さらにアンケート結果についての考えを引き出すことで、ねらいとする道徳的価値への問題意識や意欲を高める工夫があるとよい。
 - ・発問が端的で、生徒にとって何を問うているのかがよく分かる発問であった。
 - ・生徒の聞く力や話す力が大変よく身に付いている。学校としての一つの大きな成果であると感じた。また、生徒が自分との関わりの中でねらいとする道徳的価値についての考えを深めていた。
 - ・教師のコーディネート力がすばらしい。一人一人の考えを丁寧に見取り、共感しながら発言を整理していた。
 - ・板書計画が丁寧に作成されているため、生徒の思考の跡がよく分かる板書になっていた。
 - ・温かい人間関係と安心感のある授業空間がつけられていた。今日の生徒の姿がまさに4－（7）の姿ではなかっただろうか。生徒の心が耕された1時間であった。
 - ・内容項目とねらい、資料に含まれる道徳的価値の整合性を図ることを大切にしてほしい。
 - ・展開の後段では、生徒がねらいとする道徳的価値が日常生活においても大切だと自覚できることが大切である。自分の学校のよさを「あいさつがよい」「授業に集中できる」「地域とのつながりがある」などと発言していたが、気付かせたいことはそこではなく、そのような状況をつくっているもの、つまり、生徒同士、生徒と教師や学校の人々との信頼関係や敬愛の念があることに気付かせることでねらいとする道徳的価値の自覚が深まっていくのではないかと思う。そのためには、なぜそう考えるのかをぜひ問うてほしい。「どうして二中ってこんなによい学校なんだろう」「どうしてそう思うの」などと問いかけることで、「信頼関係」や「先生の支え」、「心のつながり」に気付くのではないかと思う。
 - ・道徳の時間は、生徒に望ましい行為や今後の具体的な決意について求めるものではない。先輩からの言葉も「こうなってほしい」ではなく、三年間過ごしてきた二中への思いを語らせてほしい。そのような先輩の姿に触れることを通して生徒一人一人の愛校心を育てたい。

4 成果と課題

- (1) 成果
- ・生徒が普段の生活で直面してきた経験と関連付けて考えられるようにすることで、生徒が自分の言葉で語ることができることを確認できた。
 - ・導入から展開へ移る際に資料の注目点を示したり、生徒から出された心情や考え方を類型化して板書したり、効果的に授業をコーディネートしたりする手法を学ぶことができた。
- (2) 課題
- ・道徳の時間の特質は、即効的に生徒に変容を求める時間ではなく、内面を育てる時間であることを再確認し、終末の在り方を考えていきたい。